

鼎談 「正倉院文書と下総国戸籍」

【出席者】皆川完一（元東京大学教授）

吉村武彦（明治大学大学院長・市川市史編さん委員会委員長）

加藤友康（明治大学大学院特任教授・東京大学名誉教授）

○吉村武彦（以下、吉村） 新しい市川市

史の編纂が始まって四年たちます。旧版の市川市史が刊行されてから三十数年がたちました。この市史は、当時、模範的な地域史として大変高い評価を得ていたと思います。古代史関係では井上光貞さん、滝口宏さん、竹内理三さんら一流の研究者が参加されて編纂されました。

今回の新版は、この間の著しい研究の進展と考古学の発掘成果を踏まえて編纂しようという意図があります。基本的コンセプトとしては、市川市の地域的特色を存分なく取り込もうという目標を持っています。奈良時代の市川市域というのは、下総国の葛飾郡に所在していました。大変恵まれた



吉村武彦編さん委員長

ことに、正倉院文書の中に七二二年（養老五年）の下総国葛飾郡の大嶋郷戸籍があり、今回刊行する報告書はこの戸籍の復原をめざしています。

正倉院文書の調査を経験されている加藤さんのほうから、なぜ復原が必要なのか。

そのままの形で残っていないということですが、なぜ復原という形をとるのか、その辺りからお話願いますでしょうか。

■正倉院文書とは

○加藤友康（以下、加藤） 本日、おいでいただいている皆川先生には、後ほど詳しくお話を伺えればと思いますが、まずは簡単に概略をご説明しておきます。

正倉院文書と言われるものは、広い意味での今の正倉院校倉の中にあつた（実際には、現在は完全空調の宝庫におさめられている）文書全体を指す場合と、狭い意味で正倉院の中倉とよばれる区画に伝来した古文書という、二つの分け方があると思います。下総国の戸籍は、狭い意味での正倉院文書という範疇の中に属しているものが中心になっています。

正倉院文書は、皆川先生¹や西洋子さん²のご研究にもありますが、江戸時代の天保年間に穂井田忠友が、調査・整理をし、もともと奈良時代の大量の文書のなかから四五巻の「正集」という編成がされまし